



社会福祉法人 聖隷福祉事業団
総合病院 聖隷三方原病院
聖隷おおぞら療育センター

〒433-8558
静岡県浜松市北区三方原町3453
TEL 053-437-1467

発行責任者 荻野和功
編集者 横地健治

2018年7月1日

「重症心身障害児の知育」

横地 健治

最近、私たちの施設では、重症心身障害の小児、特に就学前児の知的発達を促す働きかけを「知育」と呼ぶことが定着してきました。こうした在宅児への働きかけは、長年「ひかりの子」(現在は、児童発達支援センターの制度)で行ってきました。この一年は、入所児に対して「知育園めばえ」として行ってきました。重症心身障害があっても、発達期年齢では、その子の知的発達は最大限保障されねばならないとするのが私たちの立場です。それでは、これをどんなふうに行えばいいでしょうか。

まず、有意な言語理解のない子たちについてです。健常児の発達段階に近似すれば、1歳未満の発達年齢で、新生児期から11ヵ月までの発達段階の子ということ。これは、ひとくくりにするには、あまりにも幅広いものです。あくまでも個別的にその発達段階を評価して課題設定すべきです。これは、重症心身障害の成人でも同じですが、小児ではさらに詳細な発達段階評価が求められます。その

理由は以下のようなものです。重症心身障害があっても、発達期の小児では、的を射た知育を行えば、その子なりの発達は得られるはず。そうならば、新しい段階に移ったことになり。そうしたら、その段階に見合った知育は、前の段階のものとは違ってきます。発達の勢いが強い子ほどわずかな時間で次の段階に移るはず。また、知育課題がその子のその時の段階に見合っていれば、より短時間で次に移るはず。こうしてみると、最高の知育を行って見れば、知育対象の発達段階とその対象が受ける知育課題は常に変わり続けていることになり。そして、これは一人一人違ってることになります。もちろん、これは極論です。それでも、その子の発達段階評価とその段階にみあった知育課題設定は極めて重要であり、これが当たってなければ、意味のある知育にはならないと思っています。

有意な言語理解のない子たちの心に、外界はどう写っているかを想像することは何より重要。外界にある最大の関心事はヒトだと思えます。新生児の研究では、眼が二つ並んだ丸い輪郭の絵に注目するとされています。自分と同じ種であるヒトの顔に心が引かれ、そのうち眼を特に注目するようになります。一方、聴覚は視覚より早く発達するので、ヒトの顔より声に注意を払い、人の区別をしていると私は思います。最初は、自分にとって絶対的保護者(母)が、唯一の他者(ヒト)です。その後、ヒトは他の動物やモノとは違う存在であり、ひとりひとり違う心を持った存在として認識するようになります。この前提には、今日の前にいる他者(ヒト)が、過去に直面した他者と同一か否かがわからねばなりません。これがわかるためには、過去の出来事を要約して記録する能力が必要です。この能力はかなり高度なものです。その後、対象認識能力が成熟し、対人関係の経験から学習し、顔貌・表情の視覚情報を主にした健常者の対人認識レベルに至ります。健常者はこうした対人認識作業を無意識で行っていますから、ヒトならば誰でもそうしていると思いがちです(例:「今日のAさんは、暗い顔を

している」、何か嫌なことがあったに違いない)。しかし、重症心身障害児が、健常者と同じように対人認識をしているはずはありません。また、対人関係の経験は積んでいるので、その学習は脳障害のため制約があっても、新生児の対人認識に留まっているはずありません。個々の重症心身障害児がどのレベルの対人認識にあるかを常に見極めなければなりません。重症心身障害児の知育課題として、他者(ヒト)の理解を深め、他者との交流経験を積ませることは最重要と考えています。

次に、有意な言語理解のない子たちは、外界にあるモノ(聞こえるものを含む)をどうとらえているかを想像することも重要です。外界のモノについて、健常者で例を挙げると、抽象面を見て、意味不明として、気分が悪くなる人がいます。また、ある人は熱狂する音楽を、不快な騒音として、気分が悪くなる人もいます。外界のモノは、知覚さ

れ意味づけされて、存在するものになるのが道理です。健常者では、この意味づけ課程に聴覚言語体系が直結します(例:かむと少しすっぱいがおいしい赤い球状な物に対し、「おいしそうなりんごがある」。新生児にとって視覚

が重要です。外界にある最大の関心事はヒトだと思えます。新生児の研究では、眼が二つ並んだ丸い輪郭の絵に注目するとされています。自分と同じ種であるヒトの顔に心が引かれ、そのうち眼を特に注目するようになります。一方、聴覚は視覚より早く発達するので、ヒトの顔より声に注意を払い、人の区別をしていると私は思います。最初は、自分にとって絶対的保護者(母)が、唯一の他者(ヒト)です。その後、ヒトは他の動物やモノとは違う存在であり、ひとりひとり違う心を持った存在として認識するようになります。この前提には、今日の前にいる他者(ヒト)が、過去に直面した他者と同一か否かがわからねばなりません。これがわかるためには、過去の出来事を要約して記録する能力が必要です。この能力はかなり高度なものです。その後、対象認識能力が成熟し、対人関係の経験から学習し、顔貌・表情の視覚情報を主にした健常者の対人認識レベルに至ります。健常者はこうした対人認識作業を無意識で行っていますから、ヒトならば誰でもそうしていると思いがちです(例:「今日のAさんは、暗い顔を